

出題のねらい

文学的文章と古文から一題ずつ出題されます。

㊦の文学的文章は北村薫「四角い世界」からの出題です。主人公はとても珍しい外国語で語られた映画の字幕を担当します。翻訳が難しい言語なので、真面目に仕事をすればするほど、不正確な翻訳にしなければならないことを主人公は思い知る。そして、その悩みは自分にしかわかりません。この言語を話せる日本人は他にいないからです。そんな極端に個人的な事情と、それをかかえた人物の心情、そのふたつを読み取れるか、という問題です。

㊧の古文は、清少納言の随筆『枕草子』からの出題です。『枕草子』は、随想章段・類聚章段・日記的章段の3種に分類されますが、ある日の出来事を記した日記的章段から出題しました。春なのに寒い日に、清少納言のもとに、藤原公任から和歌の下の句が届き、それにふさわしい上の句を詠んで返すという「もと付け」をしたという記録です。清少納言の緊張感、不安、そして自慢が読みとれます。

難易度は古文の方が高かったようです。こういう場合、古文はできる問題を確実に正解すること、そして、文学的文章はできるだけたくさん正解すること、それを心がけましょう。

㊦

【解答】(50点)

問一	a 異邦	b 飛躍	c 懐	
	d 浴	e 収穫		(各2点×5)
問二	A ウ	B ア	C エ	D イ
				(各3点×4)
問三	ウ			(4点)
問四	ウ			(3点)
問五	罪悪感			(3点)
問六	エ			(4点)
問七	《ここは、こうでなければならない》という思い			(4点)
問八	変わらぬ声			(4点)
問九	自分のつけた字幕によって、元の映画とは全然違ったものになってしまったから。			(6点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。「異」を「違」、「獲」を「獲」としないようにしましょう。4割ほどの正答率でしたが、合格を確実にするには8割が欲しいところです。漢字の正答率が合否に直結することは多いので、日頃から漢字練習をしておいてください。

問二 語彙力(知識)、および文脈に合致する言葉を選び取る、思考力・判断力を測る問題です。Aは、「これこそはという作品」を買い付けて来て「限られた観客に」観せるのですから、選び抜いたという意味の語が適当です。Dは、「《どうあっても……こう話してほしい》」、「しかし」と続くので、こうあるべきなのにその緻密さに欠けている、という意味を表す語を選びます。正答以外の選択肢の語句についても、意味を調べ、正しく使えるようにしておきましょう。よくできていました。

問三 文脈に合致する言葉を選び取る、思考力・判断力を測る問題です。空欄の前の「日本人で、その言語を理解するのはわたし一人」は、空欄の後の「連絡が入った」ことの原因・理由なので、「そういうわけで。それゆえ」の意味のウ「だから」を選びます。よくできていました。

問四 文脈に即して本文を適切に理解しているかどうか、思考力・判断力をみる問題です。「もう一つの」とあるので、これ以外の「螺旋」は傍線部の前に出てきていることがわかります。前を探すと、「監督には監督の作りたい世界がある。その辺りの思いと原作の持ち味が、微妙に、螺旋のように振れて」とあります。よって、この内容のウが正解になります。よくできていました。

問五 空欄にふさわしい語句を本文から抜き出す、判断力を測る問題です。空欄の直前・直後にあるヒントを見逃さないようにしましょう。空欄の七行後には「罪悪感以上に強い、奇妙な良心に従って」とあり、それまで「わたし」が感じていたものが明らかにされます。英語の字幕も間違っていたが、「わたし」も正確に訳したわけではない。つまり、捏造(ねつぞう)です。正確に訳さず捏造したことに対する心情は罪悪感ですね。よくできていました。

問六 本文の表現を正しく理解する、思考力と判断力をみる問題です。「物語」と「画面」とはそれぞれ何を指すのか、傍線部前の二文に出てきています。「確かに傑作なのです、映像としては」「ただ、語られている言葉に問題がありました」とあります。これでわかるでしょう。よくできていました。

問七 そんなに難しい問題ではなかったようですが、正確に抜き出すことができておらず、それで不正解になった例が目立ちました。「抜き出して答えよ」という問題は正確に問題文を書き写すようにしましょう。文脈に即した言い換えを見分ける、思考力・判断

一般入試／国語(中期)

力を測る問題です。傍線部の直前に「罪悪感以上に強い」とあるので、「強い」心情であることがわかります。すると、二段落前に「《ここは、こうでなければならない》という思いの方が強かったのです」とあります。それが手掛かりになるでしょう。

問八 表現に留意し、対照的な語句を抜き出す、語彙力・思考力を測る問題です。傍線部後の一文に、「口にしたのは違う言葉」とはどういうことかが具体的に述べられています。「笑いながら哀しみを語り、泣きながら喜んでいました」。つまり「わたし」の字幕によって、映画の登場人物の言葉は変えられてしまったということです。しかし、鳥の声には字幕はつけられないので、人物たちの台詞とは対照的に「変わらぬ声」で鳴くことになります。

問九 物語の展開から表現の理由を読み取り、適切に表現する、思考力・判断力・表現力を測る問題です。「わたしの字幕がついた時」、画面の人物は元の映画とは「違う言葉をしゃべ」ることになります。つまり、元の映画とは全然違ったものになり、元の映画の台詞通りに字幕をつけていたなら存在しなかったはずのものが出来上がってしまった、ということになります。答えがそういうものであることは、みなさんもわかるでしょう。けれど、それを正確な日本語で書くことが難しい。それで減点されることが多い問題です。正確な日本語を書けるよう日頃から心がけましょう。



【解答】(50点)

問一	(1) きさらぎ	(2) エ	(各3点×2)
問二	エ		(4点)
問三	ウ		(4点)
問四	④ ア	⑨ エ	(各4点×2)
問五	イ		(4点)
問六	⑥ 早く早く	⑧ 寒いので	(各4点×2)
問七	下手な上に、返事が遅いということまでも、もし加わるならば。		(4点)
問八	白居易(白楽天)		(4点)
問九	(1) し	(2) 九九九年～一〇〇一年	(各4点×2)

【解説】

問一 月の旧暦の読みは、「むつき」「きさらぎ」「やよひ」というように、すぐに口をついて出てくるように暗唱しておきましょう。旧暦二月は、春真っ盛り。「つごもり」(月末)とありますので、桜も散ってしまった春爛漫な季節です。選択肢のなかでは「春たけなわ」しか選べません。本文に見える「雪少しうち散りたるほど」などに引かれ、「冬の終わり」「早春」と誤答する人も少なからずいました。

問二 格助詞「の」を識別する問題です。現代語でも、連体修飾格以外に、主格、準体法がありますが、古語では同格、比喩もありました。主殿司の言葉は、「公任の宰相殿の手紙です」という意味と読みとれますから、準体法と判断できます。選択肢は、アは主格、イは同格、ウは比喩、エが準体法です。

問三 和歌の知識として、「もと」が上の句、「すゑ」が下の句ということは、知っておきたいものですが、音節数を数えれば、「少し春あるここちこそすれ」が七音・七音の下句、「空寒み花にまがへて散る雪に」が五音・七音・五音の上の句と判断できるはずですが。下の句を示して、ふさわしい上の句を付ける遊びを「もと付け」と言われます。公任は清少納言に「もと付け」を求めて来たのです。副詞「いかで」は、文末の疑問・反語表現と呼応して「どうして」の意になる場合と、意志・希望表現と呼応して「何とかして」の意になる場合があります。ここは前者。助動詞「べから」は、適当。問八の解説に引かれて、アと誤答した人もかなりありました。

問四 ④の古語「はづかし」は、こちらが恥ずかしくなるほど相手が立派という意味です。よくできていました。公任は、『拾遺抄』や『和漢朗詠

集』の撰者で、和漢の教養人として、当時の貴族の間で一目置かれていました。「それぞれ」に当たる源俊賢・藤原実成も、上達部・殿上人で立派な貴族が清少納言の漢詩文の教養と和歌の才能を試そうと、その反応を窺っているのです。

⑨の名詞「こと」は、漢字を当てると「事」と「言」があり、後者で「歌」の意も多く使われます。これも後者ですが、人々が言っていることの意で、文脈から、エの評判がピッタリです。

問五 問三の解説を参照してください。「ことなしびに」に漢字を当てると「事無しびに」で、副詞的に用いられ、何気ないふり、知らぬふり、の意です。「言ひ出づ」は、言葉に表す、口に出していう、の意で、文脈から考えると、立派な方々から試されているのに、どうしていいかげんな返事ができようか、いいかげんな「もと付け」はできない、という意になります。

問六 ⑥の副詞「とく」は早く、よくできていました。⑧は、形容詞の語幹に接尾語「み」が付くと、「～ので」という原因・理由を示す表現になります。「山深み」(山が深いので)など。百人一首にも「瀬を早み」「風をいたみ」と始まる和歌があります。

問七 副助詞「さへ」の意味は、添加です。ある事柄に、「その上～までも」と、ある事柄を加えます。一般的に、和歌を贈答する場合、贈られてきた和歌に対する返歌は、素早く返すことと、上手な和歌を返すことが求められます。「遅うさへあらむは」という表現からは、返歌する場合の最悪なこと、すなわち、返歌が下手な上に、返すのに時間がかかって遅いということまで、重なるということが想定されていることに気づかなければなりません。「言葉を補うこと」という条件は、「下手な上に」などを補うことが求められているのです。「む」が仮定であることにも、気づきたいところです。

問八 高等学校の古典の授業で『枕草子』を学ぶ機会があった人は、白居易(白楽天)の『白氏文集』が平安貴族の共通の教養であったことを教えられたはずです。

問九 (1)「過去の出来事を回想する」時に用いる助動詞と言え、ば、「き」です。連体形の「し」が「定めたまひし」「中将におはせし」「語りたまひし」などと用いられています。

(2) 日記が出来事のあった当日に書かれるとは限りません。過去に経験した事柄を回想して時間が経過した後に記される場合も少なくありません。

この章段の最後の一文「左兵衛督の、中将におはせし、語りたまひし」は、現在「左兵衛督」である藤原実成が、当時まだ「中将でいらっしやった」が、そのように語られた、ということです。(注)を見ると、実成が「中将」になったのが長徳四年(九九八)十月と知られます。この章段に見える出来事が「二月つごもり」のことですから、翌年の九九九年以降の二月の出来事ということになります。一方、本文では、公任が「宰相」と呼ばれていません。(注)を見ると、公任は長保三年(一〇〇一)八月に「中納言」になっていますから、公任が「宰相」と呼ばれていたのは、一〇〇一年二月までだったと判断できるのです。つまり、この章段に記された出来事があったのは、西暦で言えば、九九九年～一〇〇一年の間ということになります。

【現代語訳】

二月の月末ごろに、風がひどく吹いて、空が真っ黒な時に、雪が少しちらちらと散っている時分、黒戸に主殿寮の下級役人がやって来て、「ごめんください」と言うので、近寄ったところ、「これ、公任の宰相殿のお手紙です」と入って渡すものを、開けて見ると、懐紙に、
少し春あるここちこそすれ

(今日は少ししか春らしい感じがしませんね)

とあるのは、なるほど、今日の天候に、実によく合っているが、この下の句の上の句を、どのように作り添えればよいだろうか、と思い悩んでしまった。「その場にいたのは、誰と誰か」と主殿司に問うと、「誰それ」と答える。皆、実に立派な方々の中で、公任の宰相への御返事を、どうして、いいかげんにできようか、と自分一人で苦しいので、中宮定子様に御覧に入れよう、と思ったけれど、ちょうど一条天皇がお出でになって、一緒にお休みになっている。主殿司は、「早く早く」と言う。たしかに、下手な上に、返事に時間がかかって遅くなるということまで加わっては、まったく取り柄がないので、どうなってもよいと思って、

空寒み花にまがへて散る雪に

(空が寒いので花にまちがうように散る雪に)

と、ブルブル震えるような筆跡で書いて、主殿司に与えて、どう思われるだろう、とわびしい気持ちになる。この私のもと付けの評判を聞きたい、と思うが、非難されているならば、聞きたくない、と思っていると、「俊賢の宰相などは、『やはり一条天皇に奏上して清少納言を内侍にさせていただこう』と評価なさっていました」とだけ、左兵衛督が、当時まだ中将でいらっしやったが、お語りになったことだった。